

日差しはあっても、空気の冷たいある朝、私はAちゃんと一緒に羽根つきをしていました。打ち返された羽が宙を舞うのを目で追っていたAちゃんが、ふと「せんせい、そらがきれいだね」と、澄んだ空の青さに気がつきました。そこに流れる一筋のひこうき雲にも目を留めたAちゃんに、「あのひこうきは、どこまで行ったかしらね」と私が言うと、しばらく考えたあと、「…宇宙かなあ？」と笑いながら言います。そして、私たちは、年長組の子どもたちと歌っている『宇宙ロケット』の歌を、一緒に口ずさみました。

このような子どもたちとの何気ない会話ややり取りにも、心の成長を感じます。

一人ひとりが大切なかけがえのないなかまであることを感じる時

— 三学期の保育の視点④より —

今、年長組の子どもたちの多くが、“名刺交換ごっこ”をすることを楽しんでいます。

ある時3人の子どもたちが小さな紙に自分の名前を書いたものをヨーグルトのカップにためて、その紙を取りかえっこしているのを見て、大漉先生が「名刺交換みたいね」と声をかけました。はじめはその3人と大漉先生での名刺交換でしたが、それがだんだんと広がっていきました。最近では、年長組の友だちや先生たちとの交換だけでなく、年中組・年少組の保育室にも訪ねて行き、先生たちと交換している子どもたちです。

子どもたちは、小さな白い紙に自分の名前とワンポイントとなる絵を描き、自分の名刺を作ります。何枚か出来上がると、それを持って友だちのところに行き、お互いに名刺を一枚ずつ手にして、「〇〇です。よろしくおねがいします」と言いながら、握手をしたりおじぎをして名刺を交換するのです。そして、交換した友だちや先生たちの名刺を、画用紙で作った冊子に大事に貼っていきます。貼りためた名刺を何度も何度も見返し、書かれているひらがなに指を置きながら声に出して友だちの名前を言ってみては、うれしそうな表情をしている子どもたちです。

今まで、気心の知れた友だち以外の子どもや大人（先生）と話をすることに大きな緊張をしていたような子どもたちも、自分の名刺を手に、「めいしこうかんしょう」とことばを伝えます。そして、小さな声ではありますがしっかりと、「〇〇です。どうぞよろしくおねがいします」と言います。また、一人で年中組や年少組にも



出かけていき、他の先生たちとも名刺を交換してニコニコと戻ってくる子どももいます。

“名刺交換ごっこ”によって、ひらがな（文字）への興味を抱き始めた子どももいます。また、名刺を相手に渡すときに自分の名前と、「どうぞよろしく」とひと言伝える中で、自分を表現する機会を持っています。少し恥ずかしそうに首をちょこっとかしげながら名刺を手渡す子ども、緊張で名刺を持つ手に力が入っている子ども、名刺交換することがとにかく嬉しくて笑顔いっぱいの子も…子どもたちの姿は様々です。この遊びはもうすぐ始まる新しい小学校の生活のどこかにもつながっていくでしょう。

何よりも、交換した友だちの名刺をうれしそうに眺める姿を見て、子どもたちにとって、そら組・はやし組の友だち一人ひとりがかけがえのない大切ななかまとなっているのだと感じています。

「缶けり、またやりたいな」

— 三学期の保育の視点④より —

先日、クラスでの集いの中で缶けりを初めて行いました。『今回はオニは大人がやる、見つかってしまったらその子どもはアウトとなり決まった場所で他の子どもたちを応援する』というルールです。最初こそ缶を蹴るタイミングを間違えてあっという間に見つかってしまったたり、隠れることに必死で缶のことなどすっかり忘れてしまっている姿もありましたが、何度かやるうちに見つからないようにうまく隠れたり、缶を蹴るタイミングをよくよく見計らえるようになりました。私もオニとして必死に缶を守りつつ、隠れている子どもたちを探し出します。オニに見つかってしまった子どもたちは、まだ見つかっていない友だちをじゅうたんのところから応援します。オニの私が、まだ隠れている子どもを探そうとちょっと油断して缶から目を離したすきに、どこからかピューッと走り跳んできた子どもに缶を蹴られてしまいました。私が「缶を蹴られました！オニの負け！」と言うと、見つかってしまった子どもたちも、まだ見つかっていなかった



子どもたちもみんなが真ん中に集まって「やったー！」と喜び合っていました。

その後も、仕切りなおして何度か続けました。その日、私が子どもたちに缶を蹴られることなく全員を見つけ出せた（オニが勝った）のは1回だけでした。（その時の子どもたちは、なんとも残念そうに、みんなで一緒に悔しがっていました。）そして、また缶けりができる機会

を楽しみに待っている子どもたちです。

缶けりを通してだけでなく、様々な遊びの中、クラスや学年での集いの中で、なかまが一緒だからできることの楽しさを感じ、なかまと共に喜びや悔しさを分かち合っている子どもたちです。また、なかまがいることで、一人では成しえないような、思いがけないワクワクすることに出会っています。

子どもたちには、その一つひとつを糧として、人と共にいることを嬉しさやルールを守ることのさわやかさ等を感じて育ってほしいと願います。

(佐々木 花)